

オンリーワンのものづくりストーリー

誰に何をどう伝えたいのか。 本質を考え抜き、 唯一無二の「展示」を創造

美術品や文化財の展示ケースをはじめ、ディスプレイ製品やオブジェをオーダーメイドする細見工業。「魅せる」「伝える」をカタチにするものづくり企業だ。

城東地区

細見工業
株式会社

設立年: 1988年
資本金: 1,000万円
代表取締役: 細見 大作
従業員数: 20名
(内、女性従業員数3名)
〒124-0001
東京都葛飾区小菅1-11-20
TEL: 03-3838-2121
<http://www.hosomi-kogyo.co.jp>



自社工場で作る全てがオーダーメイド。金物加工の技術を部材一つひとつに結集させている

お客様のお客様まで意識し、難解な要望にも徹底して向き合う

博物館や美術館に並び展示物を収納する展示ケース。いうまでもなく鑑賞物の魅力を損なうような設えであってはならない。

そんなミュージアムケースのオーダーメイドを請負う細見工業は、デザイン・設計・制作・施工・取付まで自社で一貫して取り扱うものづくり集団。「ケースの存在感を限りなく消し去りたい」「頑健なセキュリティを確保しつつ、鍵穴などは見せたくない」といった難問でも、細見工業なら限りなく要望を受け入れてくれると多くの企業から信頼を寄せられている。

「直接のお客様であるディスプレイ会社や各施設の方々はもちろん、お客様のお客様、



ディスプレイ業界の大手企業で経験を積み、2002年から同社の経営に手腕を振るう細見大作代表

つまり実際に展示物をご覧になる方々の視点まで意識し、「誰に、何を伝え、どう感じてほしいのか」を突き詰め、それを具現化するのが私たちのものづくりの姿勢です」

細見大作代表がそう語るものづくりのスタンスこそが同社の真骨頂。信念を揺るがすことなく約半世紀の歴史を刻んできた。

日本最古の顕微鏡を飾る360度ガラスのケースをカタチに

製作全体の指揮を執る海老原栄輔製作部部長は、「難しいからこそ面白い」と胸を張る。その精神を物語る好例が日本最古の顕微鏡の展示ケース。博物館側は「緻密な機械構造を余すところなく観てもらいたい」と、360度ガラスで覆った筒形ケースをオーダーしてきた。

問題になったのは、筒状のガラスを固定する金属の土台や骨組みをいかに目立たないように設置し、かつ強度を確保するか。ガラスと金属の接合はミリ単位の作業。塗装にも細心の注意が払われた。完成したケースにライトが当てられ、そこに顕微鏡の雄姿が浮かび上がった瞬間、「最高のケースができた」と立ち会った全員で喜び合ったという。

展示ケースには金属、ガラス、木、布など多彩な素材が駆使され、塗装や溶接の方法も千差万別。強度や気密性、セキュリティ面での充実も欠かせない。いわば、展示ケースは技術の集大成であり、この技術を体得するには一朝一夕にはいかない。

「だからこそ探求への興味が尽きず、常に新たなチャレンジを楽しめるんです」と、海老原さんは学びの連続だと、仕事の奥深さを語ってくれた。

想定外の事態を乗り越え、完成の日の目を見たときの達成感

円滑なものづくりを進めるには全体の進捗を管理する存在が欠かせない。その要となるのが同社の営業推進部だ。「営業」と名が付くが、要望のヒアリングからプランニング、さらにはそれに基づく各種手配をこなし、取付施工にも立ち会うなど全工程に関わる。

入社1年目の田中琢人さんは、大型商業施設のエレベーターやエスカレーターの壁面装飾を担当した際、その難しさと共に大きなやりがいを感じたという。

「木目の枠を格子状に組み上げ、所々に観葉植物を飾るケースを配置するというデザインでしたが、消防法の兼ね合いで本物の木を使うことができないため、ステンレス素材に木目のシールを貼り付け、ビス止めなども見えないようにする工夫が求められました」

田中さんが何より骨を折ったのは、現場での取付だったと振り返る。

「大規模案件でしたから関わる業者は多岐にわたり、その整理だけでも大変でした。各工程ごとに段取りをきっちり調整しなければ、現場は大混乱に陥りますから気が抜けません。そうした苦労が実り、完成の日の目を見たときの達成感は忘れられません」

完成後には友達を施設に連れて行き、「俺たちが作ったんだ」と誇らしげに自慢したと笑顔を弾ませた。



「私たちがリカバーするから心配はいらない」と、若手のチャレンジを日々後押しする海老原栄輔さん



多くの力がひとつになって完成するミュージアムケース。展示品を美しく引き立てる



ベテランと若手が一体となってものづくりに挑み、固有技術の継承が着実に進んでいる

自ら手掛けた装飾が
多くの人の目に触れる喜び!



田中琢人さん

編集部「ハツタロー・ケンジロー」メモ

葛飾ブランド「葛飾町工場物語」に認定された実力派

同社の創業は1969年。1972年からディスプレイ業界に参入し、船の科学館の展示室内の装飾金物の受注をきっかけに本格的に装飾金物の製作を開始した。以来、国立科学博物館、日本科学未来館などの装飾を手掛け、商業施設、イベント展示、ショールーム、オフィスなどへも領域を拡大。2008年には葛飾ブランド「葛飾町工場物語」に同社の展示ケースが認定されるなど、東京

を代表するものづくり企業に成長している。

眼光紙背に徹す——。これは、表面の意味だけでなく、その裏に潜む深い意味までも読み取ることの重要性を謳った言葉だ。細見代表の座右の銘であり、同社のものづくりのスタンスが体现されている。つまり、顧客に展示を通じて伝えたいことを理解してもらうために、単純にハード(モノ)を作るのではなく、「伝え方」から考え抜く。そこに、細見工業がディスプレイ業界から絶大な信頼を集める由縁があるのだろう。

さらに詳しい会社情報は

東京カイヤハッケン伝! サイトへ >>

